

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

たとえば、中東やバルカン半島の一部チイキでは、ヨーグルトを食べるときに砂糖ではなく塩を加えるという。中にはニンニクなどを入れるところもあるそうだ。

これを聞いてどう思うだろうか？

「げー、塩なんか入れるの！ そのうえニンニク！ うー、気持ち悪い。そんなのおかしいよ。ヨーグルトは砂糖やジャムを入れるものでしょ。信じられない！」

¹ こんなふうを感じる人、さらにはこれを声に出していつてしまう人は、外国語に向いていないのではないか。

外国語を学ぶということは、日本語の常識から見れば「信じられない」ことの連続である。発音するには舌を巻けとか、鼻から息を抜けとかいう。綴り字だつたといえば「くにふえ」と書いてナイフ。そのうえ語尾になんかつけたり、順番をひっくり返したりする。まともじゃない。

この「まともじゃない」というハツソウは、自分はまともで、その価値観に合わないものはおかしいと考えるところから生まれる。でも、外国語を学ぶのだったら、日本語の常識から外れるような世界に踏み出していかなきゃ。そのときにそれまでの価値観に合致しないことをヘンだと思ふのだったら、新しい概念を受け入れるのは難しいだろう。

だからといって、その新しい概念を礼讃することは無い。英語はいつでも主語があつてリツパだ。思えば日本語はあいまいだった。いままでわたしは間違つていた。反省します。そういわれてもコまる。

² まあ、そう極端にならないで。

もちろん、ヨーグルトに塩がイヤなのはどうしようもない。そのように感じることは自体はべつに問題ではない。なにを思おうが感じようが、それは人の勝手である。だとしたら、たとえばヨーグルトに塩を入れるのだつて勝手ではないか。食べたくないものを無理に食えといわれたら、それは抵抗して当然だろう。でもね、だれも食べるとはいつていない。それどころかこの件についてコメントしてくれともいつていない。

それなのに、なにかをいたくなくてしまふ人がいる。自分の経験にないこと、自分の趣味に合わないことがおこなわれていることを知ると、まるで自分がヒテイされたかのように感じるのだろうか。

さらに、たとえば「ねえねえ、ヨーグルトに塩を入れるなんておかしいですよねえ。同じ日本人としてユルせませんよねえ。」などと、少なくともわたしにドウチヨウを求めないでください。わたしはヨーグルトになに入れていいと思つているのだから。それに、「日本人として」というのが、とても苦手なのだから。

日本人だから米を食べる、日本人だから日本語を話せ。そういうのが嫌いである。人にはいろんな生き方がある。どこかの国に生まれたからといって、それに従わなければならない時代ではない。

日本人は長年にわたって米を食べてきた。それはいい。だからといっていま全員が米を食べるべきだということにはならない。それに長年にわたる伝統を重んじるのであれば、ヨーグルトに塩を入れるという伝統もソUNCHヨウしていいはず。

新しいことに出合うと、わたしは差し当たり「ふーん」と思うことにしている。この「ふーん」の伸ばし方やイントネーションが微妙である。バカにしているのでは決してない。また「フン！」といって怒つているのでもない。ただ、世の中にはずいぶんいろんなことがあるなあ、というところで、「ふーん」なのである。

まずはヒハンも礼讃もしない。ただ静かに受け止める。そのように心がけている。

ほかの人の生き方やよその国の習慣は、ずいぶん異なる。中には受け入れ難いものもある。しかしそれに口を出してはいけない。ただ黙つて見守る。それ以上のことをするべきではないし、期待もされていないのだ。

落ち着いてみると、違うのつて面白いなあと思えるようになる。みんなが同じだったらつまらない。わたしが外国語を学ぶのは、違うものを面白いと感じるからである。

いろいろと違うものが集まると、colorfulになる。このcolorfulつて、日本語でなんていえばいいのだろう。「多彩」とも違うし、「華麗」でもない。ただ、一つひとつは色を変えることができないけれど、集まるとcolorfulというわけだ。こういうのが好きである。

⁵ よく透明を目指す人がいるけれど、わたしにはつまらない。政治や宗教や価値観をひた隠しにして、だれとでもつき合えるマルチ人間を目指すのは、どうもわたしには無理である。

だからといって、自分と同じ色でないと我慢がならないという人ともつき合えない。勝手に別の色に染められたのではかなわない。だれかがヨーグルトに塩を入れたら、「ふーん」と思つて、それからちよつと味見をさせてもらう。気に入ったら自分のヨーグルトにも塩を入れるし、そうでなければ別の好きなものを入れる。これがわたしの異文化とのつき合い方である。

⁶ ついでだが、東京のうどんの汁をどうのこうのいうのもやめてほしい。

(黒田龍之助『その他の外国語 エトセトラ』による)

*注 くにふえ——英語の「knife」というつづり字を表現している。

問一 —— 線部Aのカタカナを漢字に改めなさい。

問二 —— 線部1「こんなふうを感じる人」外国語に向いていないのではないかと筆者が言うのはなぜですか。理由を答えなさい。

問三 —— 線部2「まあ、そう極端にならないで」とありますが、極端になるとはどういうことをさしていますか、答えなさい。

問四 —— 線部3『ふーん』と思う」とは、どうすることですか。解答らんに合わせて問題文中から十字でぬき出して答えなさい。

問五 —— 線部4「こういうのが好きである」とありますが、「こういうの」とはどういうことですか、答えなさい。

問六 —— 線部5 「よく透明を目指す人がいるけれど」とありますが、「透明」とはどのような態度のことですか、答えなさい。

問七 —— 線部6 「ついでだが、東京のうどんの汁をどうのこうのいうのもやめてほしい」について、次の問いに答えなさい。

A 「東京のうどんの汁をどうのこうのいう」人に対して、筆者はどのように言いたいと考えられますか。問題文中から五十字以内でぬき出し、その初めの五字を答えなさい。

B この例を最後に「ついで」に挙げているのには、どのような意図がありますか。自分で考えて答えなさい。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

我ながら、これほど黒糖に目がないのはどうしたことだろう。沖繩から海を越えて運ばれるうち、角のとれた小さなかけら。その褐色の肌理に奥深い甘みと滋味が詰まって、飽きることがない。

主治医の先生から「三度の食事が優先、間食は控えめに。」とクギを刺されている身である。小指の先ほどのかけらを一日二つまでと決めたが、これがなかなか守れない。先日も、あと一つだけと口に運んだところを、見舞いに来た古い友人に見つかつた。

「また間食してから。」と咎められ、「黒糖はわたしの信仰です。」と思わず口走っていた。友人はふき出している。たいそうな言葉が出て来たものだが、なかば本心でもある。突然現れたかと思うまに、沖繩で戦死した兄を思う数少ないよすがなのである。

「実はな、お前には兄しやまのおとぞで。」

父が言い出したのは、終戦の前年であった。前妻との間に息子がいたのである。ほどなく、父に似て線の細い青年が水俣のわが家にひよっこりやつて来て、一緒に住むことになった。息子どころか、前妻の存在も知らされていなかった母は、十日ばかり寝込んだのではなかったか。

しかし、兄は痲性の父に似ず、穏やかで心根の優しい人だつた。共に暮らすうち、母は「魂の深か人」とまで兄のことを褒めそやすようになるのである。

貧しい百姓暮らしのこと、米の供出の割り当てを守ると、あとにはいくらかも残らない。飢饉も戦時の食糧難も、救ってくれるのは目の前に広がる不知火海であった。天草の島で育つたらしい兄は、ビナ(貝)の捕り方をよく知っていて、わたしを誘うと、しょうけ(ざる)を抱え磯に下りていくのである。

渚は命のざわめきに満ちていた。アサリ、ハマグリ、鬼の爪……。そろんそろんこ、ひしめいて、近づこうものなら本当に、こけつまろびつ逃げていく。「やあ人間ぞ。早う早う。」呼び交わし、岩肌にくっつきたり吸い付いた舌先を、はがしてはまた吸い付いての急ぎ足。最後は水の中に、とぶん。湖のような水面に、さざ波が立つばかりである。

なかには逃げ遅れて、岩陰にひっそり息を殺しているものもある。兄はそのビナを器用にひっくり返してゆく。ふとその手を休めて、「思いがけず、妹のおつたなあ。」とはにかむのである。

間もなく、兄は召集された。わたしたちのもとにやつて来たのも、遠からず兵隊にゆくことが分かっていたからだろう。部隊は北支(中国北部)のあと、沖繩に送られた。当時、代用教員の錬成所に通っていたわたしは、きょうこそ兄からの手紙が来るかと心待ちにしていたが、舞い込んだのは「沖繩玉砕」の一報であつた。

時を置いて届いた公報には、沖繩本島南部で戦死とあつたそうだ。たしかな場所はいまも分からない。戦後、ものを書くようになったわたしは取材で沖繩を何度か訪れた。兄のことを知った地元の方が「南部の戦跡をまわってみますか。」と尋ねてくださったこともあるが、ありがたく思いながら遠慮させていたのだ。

戦死した兄は、ただお国を守ろうと願つて沖繩に赴いたに違いない。それでも、島さながら戦場となり、県民の四人に一人が亡くなったという沖繩の受苦を思うと、ご厚意に甘えるわけにはいかなかった。南部にあるひめゆりの塔だけを訪れ、手を合わせた。道すがら、広いサトウキビ畑に出た。白い穂が波のように耀い、葉擦れのざわめきが聞こえるばかりだつた。

(石牟礼道子の文章による)

*注 ビナ——九州地方の方言で、小さな巻き貝のこと。 代用教員の錬成所——小学校の臨時教員の養成所。

問一 ~~~~~ 線部 a 「はにかむ」、~~~~~ 線部 b 「道すがら」の意味として、最も適当なものをア〜オから選び、それぞれ記号で答えなさい。

a 「はにかむ」

ア あいそ笑いをする イ 困った顔をする ウ すこしおどろく エ なが笑いをする オ 恥ずかしそうにする

b 「道すがら」

ア 道からそれると イ 道に沿っていると ウ 道の途中で エ 道の向こうに オ 道草を食っていると

問二 —— 線部1とありますが、筆者はどうして「黒糖に目がない」のですか。理由を答えなさい。

問三 —— 線部2 「一緒に住むことになった」とありますが、どうして父は兄とともに住むことにしたのですか。理由を答えなさい。

問四 —— 線部3 「飢饉も戦時の食糧難も、() 不知火海であつた」とはどういうことですか、答えなさい。

問五 —— 線部4 「命のざわめきに満ちていた」とはどういうことを表していますか。分かりやすく答えなさい。

問六 —— 線部5 「やあ人間ぞ。早う早う」とありますが、言葉をおぎなつて、これを分かりやすく言いかえなさい。

問七 —— 線部6 「遠慮させていただいた」とありますが、それはなぜですか。理由を答えなさい。

問八 —— 線部7 「白い穂が（ ）聞こえるばかりだった」とありますが、この表現は、筆者のどのような思いを表していると考えられますか。最も適当なものを次のア〜オから選び、記号で答えなさい。

- ア 沖繩の静かで美しい景色を見て、悲惨な戦争の傷跡から復興をとげた、沖繩の人たちの無言の努力に対して思いをはせている。
- イ 沖繩の美しい自然の輝きを見て、人間だけでなく自然も破壊してしまう戦争が二度と起こらないようにと心の中で祈っている。
- ウ 沖繩の雄大な自然が遠くまで広がる様子を見て、戦争を含めた人間の営みの小ささに気づき、自分の生き方を問い直している。
- エ 沖繩の美しく静かな風景の下に埋もれている、戦争で亡くなった、何も語らない、たくさんの人たちの姿を思い起こしている。
- オ 沖繩を訪れると戦時中のいろいろな記憶がよみがえるが、美しく静かな光景を前にすると、現実とは思えず、とまどっている。

三 次の詩を読んで、下の問いに答えなさい。

三日箸 壺坂輝代

1 正月さまを迎えに行くぞ

祖父の恒例の声を待っている
大晦日

ちかくの山から持ち帰ったのは
檜の木の新しい枝

2 どんなかたちで正月さまが姿をみせるのか
祖父の手元をみつめていた

白い木肌が現れ
家族の数だけ作られていく箸
おとなは長く
こどもは短く
そして箸は
名前を記した箸袋に納められていく

元日の朝

3 雑煮より早く昇ってくる初日

香り立つ箸で掬う新しい年

4 三日のあいだに

一年分のねがいを染み込ませる

5 小正月

正月飾りと共に焼かれた三日箸

その炎の中を

ねがいごとが天に定住するように

立ち昇っていく

いま

わたしが作る三日箸

祖父の手さばきを真似ながら

心入れを呼び覚ましながら

正月迎えをするマンションの部屋

6 チャイムが鳴る

来訪者は祖父にちがいない

問一 —— 線部1とありますが、「正月さまを迎えに行く」とは何

をすることですか。説明した次の文の [A] [D] に入れるのに適当な言葉を、それぞれ詩の中からぬき出して答えなさい。ただし、「正月さま」という言葉を用いてはいけません。

- [A] へ出かけ、
- [B] の材料となる
- [C] を
- [D] ってくる。

問二 —— 線部2 「どんなかたちで正月さまが姿をみせるのか／祖父の手元をみつめていた」とありますが、このときの「わたし」の気持ちを説明したものととして、最も適当なものを次のア〜オから選び、記号で答えなさい。

- ア 正月を祝うためにまつる神様がどんな姿をしているのか初めて見るので、祖父の手さばきに興味をひかれている。
- イ 正月を祝うためにまつる神様は本当はいないのだとあきらめつつも、いると信じている祖父をばげまそうとしている。
- ウ 正月を祝うためにまつる神様を現実の世界に呼び寄せるときに祖父が失敗しないか、はらはらしている。
- エ 正月を祝うためにまつる神様を思わせるものが、祖父の手によってできあがっていくのを心待ちにしている。
- オ 正月を祝うためにまつる神様をあてにせず、新年は祖父と心を新たに生きていこうと決意している。

問三 —— 線部3 「香り立つ箸」とありますが、この「箸」が「香り立つ」のはなぜですか。理由を答えなさい。

問四 —— 線部4 「三日のあいだに／一年分のねがいを染み込ませる」とありますが、これはどうすることですか、答えなさい。

問五 —— 線部5 「小正月」とありますが、これは日本の大部分で、一月の中ごろに行われる行事です。何のために、何をする行事だと思われませんか。この連の内容を参考にして答えなさい。

問六 —— 線部6 「チャイムが鳴る／来訪者は祖父にちがいない」とありますが、現実には「祖父」はすでに亡くなっていると思われませんか。では、「わたし」が「来訪者は祖父にちがいない」と思ったのはなぜですか。理由を答えなさい。

